



坂本政男さん（70歳）・正子さん（65歳）

坂本つり具 経営
折戸区長兼根渡神社 総代長
江名防犯協会 指導隊長
江名小学校学校評議員



折戸地区の区長を務める政男さん。普段は正子さんと坂本つり具を営んでいる。お二人には水産業で栄えた昭和時代の様子やその頃からの変化についてお話いただいた。その他に坂本さんの漁船に乗せていただき、海から中之作港を見たり、まち歩きを通して折戸地区の説明や空き家の案内をしていただいた。

坂本家について

坂本つり具は私と妻の2人で営んでいる。父・福男の実家の屋号は加十。漁師だった。船の名前は福丸。実家は江ノ浦にある。

長男は仙台、次男は東京にそれぞれ住んでいる。三男家族と江ノ浦で同居する予定だったが、震災で津波被害に遭い、高台にある安竜団地に家を建てた。安竜団地の家には三男の家族が住んでいる。

私たち夫婦は、釣具店の仕事の利便性もあり、空き家になっていた元天神商店（釣具店の斜向かいにある）を買い取り、住居にし、実家となる江ノ浦の建物は倉庫としている。私は将来また江ノ浦に住みたいと考えているが、妻は今のままお店の近くに住み続けたいと考えているため、江ノ浦の建物をどうすることもできない。

昭和期

～政男さん～

岸浦と江ノ浦は大正時代に住宅地造成のために埋め立てられた土地であり、昭和50年頃の折戸地区には、約60軒の商店や250～300軒程の民家があった。商店や民家の他に、水産加工場や鉄工所、廻船問屋といった漁業関連の施設や、支所や駐在所といった公共の施設もあり町全体が賑わっていた。

～正子さん～

折戸地区に嫁入りした頃は折戸地区の言葉遣いが荒く、とてもびっくりした。昭和の頃は、葬祭のときになると隣組の人は仕事を休み、葬祭の準備を全員でやるなど、住民同士の交流が行われていた。

現在

昭和中期には加工業を中心に栄えており、中之作港に寄港した漁船の漁師が休むことができる中之作港漁民センターなどの施設も整えられていた。オイルショックや200海里の設定後は町の中心産業であった加工業が衰退するとそれに伴い町の人口も減少し、活気が無くなってきた。人口が減少する過程では、当時4つ存在していた子供会も1つに縮小され、坂本つり具の場所にあった折戸区集会所も老朽化によって取り壊された。

震災以降は津波の被害を受け、岸浦、江ノ浦、中作では空き地が目立つようになった。また、中之作港漁民センターも津波の被害を受け取り壊された。

昭和50年頃の折戸地区

病院	2軒
床屋	3軒
ガソリンスタンド	2軒
雑貨屋	4軒
加工屋	13軒
鉄工所	5軒
大型漁船	7艘
7級漁船	4艘
廻船問屋	2軒
木材加工所	2軒
土木事務所	3軒
その他	23軒

その他：

食堂、運送屋、茶屋、米屋、魚屋、銭湯、タクシー会社、大工屋、映画館、銀行など



これから

清航館や月見亭が完成してからの生活の変化はまだ感じられないが、折戸・中之作外から来る若い人や地元の中学生在が集まり利用していることはいい動きだと感じている。

折戸の欠点として、食品販売店や飲食店がない、同居が少ない、学校が遠い、夜にひと気がないということがあげられる。また、他の地域と同じように少子高齢が確実に進んでいる。反対に利点としては、バスの停留所が多くバスも何便か走っているため、遠出も比較的しやすいと。今後の改善点としては、飲食店のような人が集まり気楽に話をできる場所ができればと考えている。震災以降は岸浦、江ノ浦、中作に子育て世代が新築し移り住んでいる。

普段の買い物は車で小名浜方面のスーパーに行くことが多いが、車が使えなくなり買い物に行くことができなくなれば、路線バスを利用したり、配達などに頼ることで食材を確保したいと考えている。

折戸地区の空き家について

地区内に空き家があるのは確認できているが、持ち主が空き家をどうしたいかということは確認できていない。また、持ち主が行方不明の家もある。

空き家になっていても、持ち主（または住んでいた人）が存命の場合は手放すことは考えにくい。ただ、その人が亡くなる頃には家が傷んでしまっているということも多い。また、大抵の場合は住んでいた人がなくなってもそのまま置いておく、という家が多い。（持ち主が）空き家をどうするかを考えると、家財道具がそのままになっているということも大きなネックになっていると思う。

今後の対策として、持ち主の所在がわかるうちに連絡が取れるようにするための名簿を作成し保管しておきたい。プライバシーの問題があるため、市の持っている情報を区では閲覧することはできず、それらの情報から探し出すことは現在では不可能だが、市とも連携しデータをまとめていきたい。また、折戸地区の家族構成のデータなどについても調査したい。最終的には、それらの情報を区長が代々引き継いでいけるようにし、空き家問題の改善に繋がればと考えている。

地域の区長会では、空き家問題について触れることは否定的であるというのが現状。プライバシーに関わることに深入りしてはならない、区長の仕事ではない、というのが多勢の意見。実際、地域をまとめていだけで精一杯になっている。しかし、今手を打たなければダメなのではないか？区長として、上から目線だと言われても地域のためにやらないといけないのではないか、という思いがある。

空き家問題に関する調査は、地域の中で信頼されている人、立場のある人が動くべきだと考えている。





和深祐司さん（67歳）

丹造水産

水産加工会社であった丹造水産の代表取締役を勤めていた和深さん。現在は趣味のヨットやバイクなどを楽しんでいる。月見亭へ行く坂道の途中にあるお家に住んでおり、最近では自宅を改修するなどDIYも楽しんでいる。和深さんには、船主の家系で育った視点から見た折戸地区の変化についてやこれからの中之作港の可能性についてお話いただいた。その他に港町の風情が残る自宅を見せていたり、魚の捌き方も教えていただいた。

和深家について

和深家は月見亭へと続く坂道の途中にある。屋号は丹造。もともとは船主の家系で、有栄丸という漁船を所有していた。折戸地区の中で船主というのはステータスであり、屋号としては丹造だけでなく有栄丸とも言われている。また、「和深」という苗字について、珍しい苗字だが折戸には3軒あり全て親戚、この苗字のルーツは和歌山にある。

私の自宅は築70年。私が子供の時にはこの家に4世代15人が住んでいた。その他に船方やそのお手伝いさんがいた。船方は山形や新潟から出稼ぎにきていた他、市内からも移住してくる人がいた。ちなみに、月見亭の裏にも長屋があったのだが、それは山六さん（＝吉田忠正さん）の長屋だった。

昔は漁業と普段の生活は密接に関わっており、エンジンの音でどの船かわかるほどだった。その頃は、今では考えられないほど賑やかだった。

水産業について

丹造の漁業は、近海で漁をする底引き網漁から始まった。昭和初期には遠洋のマグロ漁と底引きが行われていた。終戦後には、それまでは木造船だったものが鉄船になり、北洋サケマス漁になった。

1977年に排他的経済水域が設置されてから遠洋漁業は衰退していき、減船措置が取られた。1985年の第二次減船措置の際に保障金がでることになり業種転換をした。中之作の船主もこの時に業務転換をし、転換後は水産加工業や、東京に高額の物件を購入し不動産をやる人がいた。

丹造では、丹造水産として水産加工業の下請けを始めたが、約4億円をかけて新しい漁船を作り漁業も継続。しかし2年で赤字に転じ、漁業は廃業となったため、水産加工業だけが継続されてきた。丹造水産は京樽へ品出しをしていた他、ANAのビジネスクラスの食材を扱っており事業は順調であった。

東日本大震災

震災の日、東京に納品する食材の荷造りを終えて集荷を待つばかりの状態だったところに地震が来て、その後津波被災した。

被災損壊のため冷凍庫に残っていた食材は廃棄せざるをえなかったのだが、海洋投棄をするには海上保安庁や保健所の許可が下りない限りできない。魚が腐ってしまうと衛生上の問題があり放置することもできなかった。どうせダメになってしまうならと市内の温泉旅館組合などに連絡して引き取ってもらうことで、加工して避難所で食べてもらったり、近所に配って食べてもらった。

経済的には大損害だったが、後日たくさんのお礼状をいただくことができた。震災前は事業が順調だったため、本当であれば現在も水産加工業を続け、息子に継がせたいと考えていたが、原発事故の影響などもあり継続することができなかった。



現在

普段の買い物は小名浜のイオンへ行くことが多い。港の周りを散歩したり、イオンでも極力階段を利用するなどして体力がおちないようにしている。

趣味はヨットとバイク。まだまだ元気に趣味を楽しみたいと思っているが、坂の上にあるこの家についていつまで暮らしていけるか。10年以内には厳しくなってしまうのではないかと考えている。その時のことを考えると、自宅までの坂道を広げる工事をするか、またはこの家を売却して平地に家建てるのが良いのか、などいろいろと考えている。最近は売却しやすいように家財を断捨離したり、家をきれいにしている。しかし、そうするとさらに愛着がわき、離れがたいという気持ちになることもある。

下の通り沿いに住む親戚（和深よしこさん）は、月～金は娘家族の家で過ごし、土日のみ自宅に帰ってきて過ごしている。元気に過ごせるうちは、生まれ育った町で暮らしたいというきもちは誰にでもあると思う。

これから

月見亭の改修作業当時はうまくいかないだろうと思っていたが、頑張っている姿から応援したいと思うようになった。実績を積み重ねることで、住民の意識も変わっていくのではないかと考えている。

空き家問題やまちづくりについて、誰かがやらなければいけないと考えている。60歳以上が口出しすることなく、若い人が主体となってやっていくことが重要だと思う。

地域全体としては高齢化、人口減少が続いている。しかし、ここ数年は江ノ浦地区に新築が建ち、若い人が移り住んできている様子も見られる。空き地が多く、他地域と比較して坪単価が安いので、若い人でも家を建てやすいのだと思う。

マリンスポーツや釣り、海が好きな人にとってみたら、中之作のポテンシャルは高い。目の前の広大な太平洋を活かしてはどうかと考えている。海の活用として、現在でも中之作港には、わずかな漁船とプレジャーボートは置かれているが、あれだけではあまりにもったいない。市民マリーナ（安価で借りることのできるマリーナ）にしてはどうかと思う。船が増えれば、訪れる人が増え、週末はにぎわう。食堂、民宿、合宿所などの需要が増える。また、貸し船があれば、船のない人も楽しむことができる。磯遊びやカヤックなどもできるので、家族で楽しめるのではないだろうか。起爆剤になるようなイベントを企画するのも良いかもしれない。





吉田忠正さん（76歳）

元折戸区長

折戸区長を勤められていた忠正さん。現在は月見亭へと続く坂道の途中にある畑の手入れや盆栽、釣りなどを楽しんでいる。また、古文書の勉強をされており、折戸地区に残る古文書の解読なども行われている。吉田さんには、元折戸区長としての経験や古文書の解読を行う視点から見た中之作港の歴史や普段の生活についてをお話しいただいた。

吉田家について

中之作港が目の前に見える家に住んでいる。屋号は六右衛門。中之作や折戸の中では屋号を略して呼ぶ事があり、六右衛門は「ろっけむ」、清航館のある忠右衛門は「ちゅうえむ」と呼ぶことがある。

吉田家の先祖はその昔「沖船頭」（注：おきせんどう＝江戸時代、船の運航および積荷の管理などを請負う船頭）をやっていた。その後には海産物加工業（以後「加工屋」）を営んできた。加工屋の時には、その時期に漁れる魚に合わせて加工をしていた。時代が過ぎるにつれてそれぞれの加工場によって得意な分野が決まっていくようになる。

最近では、月見亭に続く坂道の途中にある畑を手入れしている。そこにも昔は建物があったが、空き地になった後、そのままにしては草が伸びるだけになるので畑として耕している。

歴史について

中之作港で起きた歴史上のできごとのなかに、江戸時代に起きた「天保の飢饉」と「新島襄の寄港」がある。これらのできごとに関しては、古文書にもその記録が残されており、当時の様子を知ることができる。

1833年に起こった「天保の飢饉」の時には日本全国で米が不作になり、生活に困窮する人が多くいた。しかし、中之作港は磐城平藩の商港として発展していたため米の出入りが多く、運搬中に海に落ちてしまったり波がかかってしまった俵の濡れ米を、捨てることなく干飯に加工して貯蔵しており、飢饉の際にはそれらを割渡すことで飢饉を乗り越える事ができたと記録されている。

1864年に新島襄がアメリカへ渡るために函館へ向かう途中、中之作港に寄港したという記録が残されている。この際に新島襄は、清航館の隣（現在の潜水さかもと駐車場）にあった「仙臺屋」という舟宿に宿泊していた。

新島襄は函館へ向かうため備中松山藩の快風丸に便乗しており、船頭の所用があつて中之作港に寄港したとなっている。1週間程度、中之作に宿泊しており、龍灯伝説で有名な赤井嶽薬師に参詣する途中に平方面に旅をしたという記録も残されている。



水産業の発展とまちの様子

中之作と折戸は、戦後の復興の中で水産業のまちとして発展していった。当時は現在ほどの流通力がなかったため、それぞれのまちで全てが完結するようになっていた。例えば、中之作と折戸の中心産業である漁業からもその事がわかる。漁をするのに必要な漁船を作る造船所が中之作と折戸のそれぞれにあり、80t ぐらいまでの船を作る事ができた。また漁船に載せる設備となる無線や電気なども町の中にある無線屋や電気屋がやっていたため、それぞれの町で漁船を作る事が可能だった。その他、漁に出るために必要な漁具や雑貨を販売しているお店もあり、普段の生活で必要なものもそういったお店で揃えていた。

飲食店も多くあり、大漁の船が帰ってきた時には漁師たちは飲み屋へ行き、酔っ払いが町の中を歩き回ることも多くあった。今ではそういったこともなくなってしまったが、当時の中之作と折戸は漁業を中心に全ての生活が回っていた。